

# ボランティア・ニュース第9号 2007.9.1 発行

## 新館長挨拶

## 馬渡 駿介



2007年3月をもって退任された藤田正一教授の後任として北海道大学総合博物館館長を仰せつかりました。2009年3月までの2年間、つつがなく大役を全うするよう努力するつもりです。皆様のご協力をどうぞよろしく

お願い申し上げます。「今度の館長はどんな奴だ?」と、興味をお持ちの方は、ネット上で馬渡駿介あるいは馬渡峻輔（ペンネームです）で検索していただければ幸いです。本稿では自己紹介を省略し、私の考えるボランティアに関して少し話させていただきます。

ずいぶん前の話ですが、日本大学医学部から北大理学部へ着任してきたばかりの頃、海外出張旅費を文部省からいただいて、ニューヨークのアメリカ自然史博物館に研究仲間を訪ねたことがあります。訪問相手 Dr Judy Winston のオフィス兼研究室には見るからに品の良い中年の女性がいました。彼女はコケムシ類の標本整理から顕微鏡写真の撮影、そして事務処理までこなし、Judy の秘書兼技術員の役を果たしていました。驚いたことに彼女はボランティアでした。個人的に話を聞くと、旦那とは死に別れ、子供は自立したので、毎日博物館へ来て Judy の仕事を手伝っている、とのこと

でした。それを聞いて、なんと豊かな国だと感銘を受けました。今から20年以上前のアメリカ合衆国の「豊かさ」は、たとえば、その後に訪問した南カリフォルニア大学ロングビーチ校の大学生協食堂のテーブルの上にも感じられました。そこには紙ナプキンが備わっており、きれいなガラスの容器の中にはスティックタイプの粉末ミルクと砂糖が束になって入っていました。現在とはともかく、当時の日本では同様の光景は見られませんでした。

上記ボランティアの例は文化的「豊かさ」をあらわし、これは大学生協食堂の例で述べた文明的「豊かさ」に裏付けられています。つまり、ボランティアの普及度は国の「豊かさ」におそらく比例します。現在の日本における文明的「豊かさ」は、少々偏ってはいますが世界的に求められているところです。ではそれに比例した文化的「豊かさ」が得られているかどうか、これまで私は極めて懐疑的でした。しかし、北大総合博物館とかわるようになってから考えが変わりました。北大総合博物館で多くの方がボランティアとして働いている事実は日本の文化的「豊かさ」を具現しています。しかしもちろん、豊かな国の国民が全てボランティアになるわけではなく、その中で精神的「豊かさ」を持った個人がボランティアになるはずで、そのようなボランティアに支えられている北大総合博物館の将来は安泰であり、日本の文化はしっかりと次世代へ継承されるにちがいません。

## 2007年度総会開かれる

5月25日 総会は28名が参加して開催されました。在田会長から、新たにボランティアグループが2つ増えたこと、皆さんの力で博物館の様々な活動に協力できたこと、今年も7月から「ファーブル展」が始まるのでみんなで支えていこうと挨拶がありました。

4月に就任された馬渡俊介新館長からは、ボランティ

アパワーに期待しているとご挨拶がありました。

資料に基づき永山さんから、昨年夏に開催されたモンゴル恐竜展では北大と月寒グリーンドームの二会場に分かれ、実数で32人が恐竜の組立、撤収、展示解説や監視に協力したこと。野幌昆虫観察会が開かれ大変好評だったこと、談話会を5回開催し、ボランティアニュースは4

回発行したこと、また7月から開催される「フェアブル展」に向けて募金活動を事務局中心に行ってきたことなど、2006年度事業報告及び今年度の事業計画案が提案されました。

4月から博物館事務の体制も変わり、事務掛長は木村さんから江島さんに、事務員は荒井さんから松尾さんになりました。

昨年10月に赴任した湯浅准教授や4月から研究支援推進員になった庄子さん、持田さんも紹介され、強力な

博物館スタッフが揃いました。

参加者からユニークな自己紹介やグループ活動報告などが活発に行われ、家庭料理やお酒、お菓子の差し入れもあり、懇親会も大いに盛り上がりました。

昨年は4名体制で事務局を運営していましたが、望月さんが学業に専念するため、持田さんは博物館職員になったため、事務局を辞めることになりました。事務局は在田会長と永山事務局員の2名、事務局員の補充が急務となっています。

## 3階展示その3(No.8からの続き)「生物標本(3階):昆虫」

(7月1日～9月17日まで企画展「レイチュル・カツ展」のため常設展示は一時お休みです)

稲荷尚記 総合博物館資料部研究員

### 昆虫について

現在、約150万種の生物が記載されているが、昆虫はその約6割を占め、陸上生態系で重要な役割を果たしている。このような昆虫類の爆発的な多様化の背景には、体の構造の変化とともに、他の生物との相互作用をめぐる進化の歴史が関係していた。[甲虫の体の構造の進化的意義については、展示室の解説パネルに詳しい]

特に、白亜紀以来種数を激増させてきた被子植

物を餌や住処として利用するように進化したグループ(甲虫目のゾウムシ科やハムシ科、鱗翅目のほとんど、膜翅目のハナバチ類など)や、他の昆虫に寄生するように進化したグループ(膜翅目の寄生蜂類、双翅目のヤドリバエ科など)は、多様化を極めた。

### 標本について

こうした多様な昆虫を含めた生物学全般の基礎となるものが標本であり、所蔵される標本コレクションの充実度が研究の質を左右すると言っても過言ではない。

当館が所蔵する約400万点の生物標本のうち、およそ半数を昆虫標本が占める(松村松年や、河野

広道らのコレクションなど)。当館の甲虫目のコレクションの特徴として、北大出身研究者が赴任した地域で集められた、戦前の樺太、千島、台湾産の標本の充実が挙げられる[この点も詳細は展示室の解説パネルに譲る]。

### 展示について

昆虫類のうち、最も種数が多い甲虫目と、3番目に種数の多い鱗翅目については、世界に分布する全ての「科」の代表種がここに展示されている。標本箱の中に収められた小さな白い小箱[ユニットボックス]が一つの「科」を示す(大きな個体を多く含む科は、複数の小箱を占めている)。

ちょっと見渡してみると、標本の入っていない小箱が目立つことに気づかれるだろう。これは、当館に該当する科の昆虫標本が無かったことを意味する。こうした科は少数の種しか含まず、あるいは限られた地域にしか分布しないものが多い。しかし鱗翅目のセミヤドリガ科のように、極度に入手困難とも言えないが、本学で研究されてこな

かったために標本が無いような場合もある。



そのような空の小箱には「募集中!」と書かれたラベルが貼られている。当館を訪れた研究者やコ

レクターの方がもしその標本を持っていて、譲っていただけるのであれば実に有り難い、という意味である。標本コレクションの手薄な部分には、わずかな数の標本が加えられるだけでも、コレクション全体の充実度が大きく増すことにつながる。これらの募集ラベルは半ば冗談っぽく見えながら、研究者の切実な願いを示しているのだ。

通常、博物館で昆虫標本を展示する場合、主要な分類群、あるいは見栄えの良い昆虫が選定されている。ところが本展示では甲虫と鱗翅目については「世界中の全ての科を網羅する」という方針を採った。その結果、地味な種や微小な種が多く、他方で派手な昆虫の多くが削られた。それでもな

ところで、本展示室は照明が暗く、その代わりに備え付けの懐中電灯で照らして観察できるようになっている。学術標本は、本来光による劣化を防ぐために暗所で保存される。そこで学術標本の大切さを知ってほしいという意味合いを込め、このように来館者にとってはやや不便な形式を採ったのだということをご理解いただきたい。

## 好評だった植物採集会

植物標本整理の学生ボランティアグループでは、2006年の5月に北大構内で植物採集を行いました。

普段は作業部屋で標本を台紙に貼る作業や、保護袋に入れる作業、標本の補修・殺菌、ラベルの新製、適切な場所へ標本を収蔵する作業などを行っていますが、どうしても作業が単純化し飽きやすくなります。そこでボランティア参加者が単純作業に徹するのではなく、標本を採集する段階から始め、標本ラベルの作り方、乾燥や殺虫のため（編集の都合で掲載が遅くなったことを心からお詫びいたします。）

お当館が示したかったことは、系統という、歴史の実体のリアリティである。昆虫というグループの圧倒的多数は一見地味だが、それこそが昆虫の実態に近いイメージであり、かならずしも派手な昆虫が生態系の主役とは言えない。

この展示室の標本を肉眼で見ても分かりづらいかもしれないが、これらの標本にしばし目をこらし、どんなに小さなグループでも、それぞれ独自の歴史と形態を担う独自の存在なのだということを想像していただきたい。また、そのことを来館者にもより良く実感していただけるよう、展示方法もさらに工夫していく必要があるだろう。

## 佐藤広行

の冷凍という、生きた植物を標本化するまでの一連の流れを体験し、標本や植物への理解を高め、色んなことを学んで行けるボランティア活動を今年度は目標にできました。

残念ながら当初の目標通りにいかず、単純作業が多い活動になってしまいましたが、標本採集に必要な道具の説明や採集方法のコツ、植物観察を行い植物標本採集は好評を得ました。次年度は採集会の回数を増やして、学べるボランティア活動を目指したいと思います。

## 「フェアブルにまなぶ」展・「レイチェル・カーソン展」 始まる

7月1日から9月17日までの79日間、『昆虫記』刊行100年記念日共同企画展「フェアブルにまなぶ」展は全国5ヶ所の先頭を切って北大で開催されています。

フランスからフェアブル自筆のノートや100年前の昆虫標本、フェアブルが活躍した南フランスの様子や生涯など興味あるものがたくさん展示されています。

また、日本の昆虫学に先進的な役割を果たした研究者や北大の昆虫なども展示され、わざわざ北大の昆虫は何処ですかと尋ねる見学者もいるほどです。

展示解説は昆虫学を専攻している学生・院生が有償で



行っています。

ボランティアの会では募金を優先的にを行い、募金箱の中にはたくさんの募金が集まっています。プレゼントのピンバッジも好評で、「ふんころがし」はかわいいと大人気で“売れ切れて”しまいました。

3階の展示室では見学者が書いたたくさんのおしりを整理したり、見学者に声かけをするなど監視役としても活躍しています。

併せて3階ではレイチェル・カーソン展が開催されています。環境問題に早くから取り組んでいた彼女の取り組みが紹介されていますが、会員が展示構想や資料集めから協力し、展示解説もするなどしています。

あと半月ほどですが、募金や監視役に協力できる方は湯浅准教授か庄子さんに連絡して下さい。

## ボランティア保険 手続きしましたか？

6月に担当者からのメールや手紙でご存じだと思いますが、ボランティア保険に入れることになりました。

活動中に事故に遭ったとき、怪我をしたときなど様々なケースに対応している保険です。「毎日行ってるわけでないからいいわ」「何時活動に参

加できるかわからないから」「手続きが面倒くさい」などなどの理由で手続きしていない方はいませんか。保険料の個人負担はありませんので、必ず手続きしましょう。

詳しくは湯浅准教授または庄子さんに連絡してください。

## 4月～6月の活動報告

- 植物標本グループでは、持田さん、星野さん、加藤さん、佐藤さん、笈田さん、伊澤さん、国安さん、山室さん、中谷さん、成田さん、川角さん、岩崎さん、庄山さん、荻野さん、神谷さん、山田さん、松田さん、岩瀬さん、寺田さん、畑中さん、鈴木さん、堀江さん、吉原さん、津久浦さん、武良さん、与那覇さん、黒田さん、桂田さん、金上さん、高橋さん、甲山さんが標本整理をしました。
- 「化石」では、中野さん、寺西さん、安田さん、石橋さん、江越さんがクリーニングや化石整理をしました。
- 鉱物グループでは寺西さん、安田さん、鳥本さんが鉱物標本整理に奮闘しました。
- 昆虫グループでは、久万田元会長、青山さん、永山さん、稲荷さん、喜多尾さん、小原さん、櫛引さん、長尾さん、須長さん、梅田さん、宮本さん、大矢さんが標本作りや標本整理をしました。
- 寺西さん、安田さん、永山さん、稲荷さんが清掃、整理、移動をお手伝いしました。  
(お名前は順不同です)

### ボランティア・ニュース

◆編集・発行

北海道大学総合博物館ボランティアの会  
(担当者:星野、沼田、永山)

◆発行日:2007年9月

◆連絡先

060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

ボランティアニュースは下記の北大総合博物館ホームページからもご覧になれます。

<http://www.museum.hokudai.ac.jp>